

## ワイツゼッカー演説

写真は日本経済新聞 2月1日朝刊1面に掲載された、ワイツゼッカー元ドイツ大統領死去の記事である。昨日は新聞の「戦争責任」についてレポートしたが、今日は政治の世界に目を向けたい。

評伝を紹介しよう。ワイツゼッカー氏の名前を戦後史に刻んだのは、ドイツの無条件降伏から40周年を迎えた1985年5月8日の連邦議会での演説だった。「強制収容所で虐殺されたユダヤ人に特に思いを寄せなければならない」。そう語りかけて戦争責任を率直に認めた。同性愛者や少数民族ロマ、それに政治犯などへの迫害にも触れた。「過去に目を閉ざす者は現在にも盲目となる」。格調高い表現で戦争犯罪を直視するように訴えた内容は国内外で広く知られる。

演説のメッセージは2つあった。ひとつはナチスの残虐性を戦後生まれの世代に伝えたこと。時代とともに戦争責任を忘れるのではなく、反省することに力点を置くべきだ。その考えは、その後のドイツ政府の指針となった。敗戦を「ナチスの暴力からの解放」と位置づけたことが2つ目の意味合いだ。これにより1933年のナチス政権誕生から敗戦までの政策は、誤りだったとの認識がドイツ社会に定着した。

ナチス政権は景気対策を乱発して、つかの間の高度成長を演出。国民の圧倒的な支持のもとに戦争に突入した。安易な財政拡大を「大衆迎合的な政策」と見なす現代ドイツの風潮は、この反省から来ている。この演説によってワイツゼッカー氏はドイツ社会の尊敬を集めただけでなく、国際社会でのドイツの印象を大きく改善することに成功した。

こうして評伝を要約してみて、あらためて戦後日本、とりわけ安倍政権との違いを痛感した。アベノミクスの名のもとに、財政拡大により景気対策をすすめ、株価上昇に浮かれ気味のなかで憲法改正に踏み込む安倍首相。戦後日本の今年に出す「安倍談話」をめぐる動きは、なんとも危ういものを感じさせる。安倍首相は「歴史をどう見るかは歴史家に任せたい」とかわすが、首相の歴史観・歴史認識が問われている。「過去に目を閉ざす者は現在にも盲目となる」というワイツゼッカー氏の言葉が心にしみる。

(2015年2月7日)

